

まずはこの「わが心慰めかねつ更級や
姨捨山に照る月を見て」という歌ですが、
これはもう今から1100年以上前に、
平安時代の初期になりますが、古今和歌
集に収められたよみ人知らず（作者不明）
の歌です。この「慰めかねつ」というの
は「なぐさめかねる」、「かねる」という
のは「しかねる」ということでして、「慰
めることができなかつた」ということで
す。「かねつ」の「つ」というのは、意志
を含む完了でして、「慰めようと思っても、
どうやっても慰めることができなかつ
た」ということを表しています。つまり、
この歌は、「私は自分の心を慰めることが
できなかつた、更級にある月で有名な姨
捨山に照る月を見ても」という意味の歌
です。

当時すでに名月を見ることができると

いうことで更級の地があった、そしてそ
こに来た人が、こうした歌を作った。そ
うしたら、後からいろんな人たちがこれ
を踏まえて次から次へと歌なりあるいは
物語を作るようになったわけです。それ
だけ、何か特別に響くもの、何か特別に
惹きつけるものが、この歌にはあるのだ
ろうと思います。それが、この地をまさ
に日本有数の歌枕の地に押し上げていっ
たわけでした、そのへんの背景にあるも
のの考え方、感じ方ということを見てい
きたいと思います。

歌 「大和物語」の「わが心慰めかねつ」の

この古今集の歌の50年くらい経った
後に、「大和物語」という短編を扱った物
語ができていますが、その中で、この歌

を含めてこういうふうに書かれています。
信濃の国の更級というところに男が住
んでいた。若い時に親が死んだので、お
ばを自分の母親のように思つて若いころ
から一緒に暮らしていた。しかし結婚し
た妻が大変情け容赦のない女で、この姑
の老いて腰が曲がっているのを憎み、夫
にこのお婆の心が性悪であると言ひ聞か
せて、齡を取ってきたし捨ててこい、と
言い続けた。結局、男は妻の言うことを
受けて、このお婆を捨てることを決心す
る。月の明るい晩に「お婆あさん、いら
っしゃい、寺に尊い法要があるようです。

お見せしましょう」というと、お婆は喜
んで背負われて、高い山の一人では下り
て来れそうもないところに置かれた。お
婆が「やや」と言つても、答えもしない
で逃げてうちに帰ってきたが、大変悲し

く思った。この晩、月が大変明るく出てきたのを眺めながら、一晩中眠ることができずに悲しく思つて、「わが心慰めかねつ更級や姨捨山に照る月を見て」と詠んだ。そして次の日に迎えに行つて連れてきた。それから後、ここを姨捨山というようになった、と。そして、全体の締めとして、「なぐさめがたしとは、これがよしになむありける」、今も心が慰められないことにかけて姨捨山を持ち出すのは、このいわれによるのだ、と結んでいます。

「なぐさめがたし」という歌

「なぐさめがたしとは、これがよしになむありける」といったもののいくつかを、資料に上げてきました。これはほんの一部です。簡単にざっとみておきますと、たとえば、最初の「あやしくも慰めがた

き心かな姨捨山の月もみなくに」（小野小

町『続古今和歌集』）というのは、どうい

うわけか心が慰めることができない、姨

捨山の月を見ていないのに、という歌で

す。あるいは2番目の「更級や夜渡る月

の里人も慰めかねて衣打つなり」（順徳院

『続古今和歌集』）は、夜、澄み渡る月に

里人も慰めかねて衣をうつことよ、とい

う歌です。あるいは5番目は、『源氏物語』

で、「姨捨山の月澄み昇りて、夜更よふくるま

まによろづ思ひみだれたまふ」は、心を

慰めることができないというあの姨捨山

の月だけが澄み昇ってくるように、慰め

がたい心ばかりが盛んになってきている、

と言っています。このように、「姨捨山」

を使いながら、それを象徴事例としてこ

の「心慰まない」ということを表現して

いるわけです。

なぜ「慰めかねつ」なのか？

最初の「大和物語」では、捨てた側、捨ててしまった側の苦しみ・悲しみを歌っていたわけですが、その後の今見た歌に見られるのは、捨てられた側、男も女も含めて、自分が、あるさびしい、わびしい状況にあるものを語る象徴として、姨捨山の月が使われています。捨てる側、捨てられる側というところにも大事な問題はありますが、ここでは踏みこみません。より問うべき大事な問題は、なぜ「慰めかねつ」なのか、ということですか。名勝の、きれいな月を見て、ああきれいだなと心「慰む」と言うべきところが、「慰まない」と言っているのか、の問題です。むろん、月を見て「慰む」という

のもあります。たとえば、資料の8番目、「雨雲のはるるみ空の月かげに恨みなぐさむをばすての山」(西行『山家集』)のよ
うに、月を見て恨みが慰む、というふうにも歌っている。あるいは3番目の「いづこの月は分かじをいかなればさやけかるらん更級の山」(隆源法師『千載集』)という歌でも、とりわけこの姨捨の山がさやけきものであるから、これを見たい、見事なものだろうと歌っています。そこでは、より「慰む」ものとして考えられていたということは容易に想像されます。が、むしろ実際には「慰めかねつ」という形で歌ってきているわけでした、その問題です。

「なぐさむ」という言葉の意味

それを考える前に、いったい「なぐさ

む」とはどういうことかについて、言葉の上から確認をしておきたいと思えます。最近の私の仕事には、難しい概念で哲学を考えるのではなくして、やさしい大和言葉の基本から考えてみたいということがあります。たとえばこの「慰む」という言葉ですが、この「なぐさむ」の「ナグ」というのは、「ナギ」すなわち風が止んでいる風^なぎ状態のこと、あるいは「ナゴヤカ」の「ナゴ」と同じところから出た言葉(『岩波古語辞典』)でして、つまり波立ちを静め、おだやかにするというふう^なに説明されている言葉です。そこから、心の波立ちを静め、気を紛らわすとか、静かになるといふような意味で使われるようになってきた言葉です。

「慰」という漢字の意味

日本語は、ひらがな、カタカナだけではなくして、中国語⇨漢字を取り入れてそれをまた日本語にしていますので、あわせて漢字の意味も確認しておきますと、「慰」は「心と、おさえのばす意と音を示す尉とから成り、心をなだめる意味を表している」(『新字源』)と字です。「心」の上にある「尉」というのは「火のし(現代のアイロン)をかけてしわをのばす、上からおさえて正しくするという意味合いで、そこから転じて警察とか軍事とか、刑罰をつかさどる大尉とか少尉とかの「尉」ですね、そういう意味合いを持って、やすんずる、なぐさめるといふ訓が付されたという経緯を持った言葉です。漢字の「尉」の方に顕著ですが、「慰む」というのは、つまりは何らかの形でおさ

えて、あるいはおさめ、そしてしずめていくという言葉です。

「しずめる」という言葉の意味

ついでに「心を静める」と言う時の、しずむ、しずめる、という言葉についてもお話します。この「しずめる」「しずむ」というのは、漢字で見ますと、静かの静、あるいは何かを鎮めるという時の字があてられており、これらはもともと同じ言葉から出たものです。辞書的には「シズ」というのはシズム(沈)とか、あるいはシズク(霽)も同じで、下に沈んで安定している様を表しています(『岩波古語辞典』)。こういうところを見ますと、日本語、大和言葉というのは本当に面白いなと思います。普段我々は全く意識していないのですが、静かだということと、沈

むということは、同じ言葉なのだということですが、説明があると「ああそういうことなのか」と納得するところがあるのではないかと思います。

話を戻すと、「慰む」というのは、心の波立ちを静め、おだやかにするという意味であるということを確認しました。問題は、先ほどの、姨捨山の美しい月を見て、なぜ「慰む」ではなくして、「慰めかねつ」と受け取られてきたかということです。より美しい月であるがゆえに、より「慰む」ところのはずなのに、むしろその「慰めかねつもの」として受け取られてきたという問題です。

ころかな(尽きなく次から次へとも思ひ、思い乱れが立ち上がってくる)など、そうしたものとして、姨捨山の月が歌枕として特権的に歌われてきたということですね。むろんそこには、常に意識されているというわけではないと思いますが、やはり「姨捨」という、大和物語で見たように、捨てる側でも捨てられる側でもある種無残な、非倫理的な物語性、物語がもっている意味というものが効いているように思います。

月の光を見るとということ

そのことについてはこの後ゆっくり申し上げるとして、実はこうした「慰める」と「慰めかねつ」の問題は、この姨捨山の月だけの問題ではなくして、そもそもが月というものを見ること、あるいは月

の光を歌うということ一般においても同じ問題があるのでして、この点を見ておきたいと思います。

月の光ということで、資料の最初に挙げておいたのは、「月みればちぢにものこそ悲しけれ わが身一つの秋にはあらねど」(大江千里『古今集』)という有名な歌です。大意は「月をみると、あれこれとものごとが悲しく思われる。私一人だけに訪れた秋ではないのだけれども」という歌です。ここで「ちぢに」というのは、「さまざまに」とか「際限なく」という意味でして、悲しみがそういう形で、慰められるのではなく、ちぢにかき立てられてくるのだという歌です。

2番目以降に挙げておいたのは西行の歌です。西行にとって、月は桜とともにもつとも大事な歌の題材でした。「影さえ

てまことの月の明かき夜は 心も空に浮かれてぞすむ」(『山家集』)という歌を挙げておきましたが、この「影」という言葉は、これも日本語の面白いところでして、光によって見えるものはすべて影です。今我々が使っているのは光が当たって、その物の影のことだけを影と言っています。昔はその光も含めて光に当たるものをすべて影と言っています。御影とか遺影と言った時の「影」は、今我々が使っている「影」ではなくて、そのものの姿のことを言っているわけです。この歌でも「影」は光という意味で、「月の光は、それ自体が澄んでいるものであり、それを見ることによってこちらの心も澄んでくる」と歌っているわけです。

「すむ」という言葉の意味

この「すむ」という言葉にも今申し上げてきたような問題があります。「すむ」という言葉は、もともとは清いという字があてられるような、クリアとかクリーンというのが基本でして、「浮遊物が全体として沈んで静止し、気体や液体が透明になる意味」が基本です(『岩波古語辞典』)。そこから、いろいろ浮遊物が沈着・静止するように問題が片づき収まる、「これで済んだ」という「済む」が派生してきます。日本人の謝り方の「すみません」というのは、これがまだ終ってないという意味です。さらにはその延長に「あちこちに動きまわるものが一つ所に落ち着き定着する」という意味あいを持ったLive||住まう、棲むという意味が出てきています。

余談ですが、こういう語感をもってい

る日本人にとって、今度の福島原発の問題はきわめて深刻な問題として感じられたのだろうかと思えます。「澄まない」が故に、「済まない」、そして、「住めない」のです。そういう感受性の問題としても考える必要があるわけでして、これは単に「測る」という問題ではありません。そうしたことも合わせて、どう考えるか、が問われているようにも思います。

「すむ」と「むらがり起る」こと

話を戻すと、そういう濁りや曇りのない透明さ、これは日本人がずっと尊んできたものでもあります。空や月や川や、あるいは音や光が澄んでいる、そしてその澄んでいるものを受けとめながら我々の心も澄んでいく。「川が澄んでいく」、「瞳が澄んでいる」というふうに使われ

てきた言葉です。こうした、いろんな浮遊物が沈着・静止するという意味で「澄む」という言葉があるとすれば、先ほどから見てきているような「なぐさむ」という「波立ちをおさめ、静止する」という言葉、あるいは「しずむ」というような言葉と、ほぼ同義語と考えることができます。

が、実は、この「すむ」という言葉にも、同じような事態が指摘されます。3番目の西行の歌「ともすれば月すむ空にあくがるる 心のはてを知るよしもがな」(西行『山家集』)ですが、これは「静まっていく」のではない、「静止する」のではない、むしろ「よりあこがれ、群がりおこって出て行ってしまおう、その心のはてをしるよしもないのだ」と歌っているわけです。4番目の「ゆくへなく月に

心の澄み澄みて はてはいかにかならむとすらむ」は「月をみて自分の心が澄み澄みて、いったいそのはてはどうなるのだ、知りようもない」と歌っています。

こう見てきますと、「なぐさむ」ということにおいても、「すむ」ということにおいても、そこには、単に波立ちが沈んで静止するということだけではないものが含まれているわけです。「なぐさむ」と「なぐさめかねる」、あるいは「すむ」と「すまない」こと、この、微妙ですが結果としては正反対の意味合いを持つ、そういうパラドキシカルな問題があるということです。申し上げましたように、特に「姨捨山の月」には、いつそうこうした要素が浮かび上がってくるわけです。以上のようなことを念頭に置きながら、以下、謡曲「姨捨」の物語を通し

て具体的に考えてみたいと思います。

世阿弥「姨捨」について

謡曲の「姨捨」は、今から600年ほど前、室町時代に姨捨伝説を受けて書かれたもので、世阿弥作とされているものです。具体的に、謡曲の展開を追いながら見てまいります。

話はまずワキ、脇役の都の旅人が登場するところから始まります。「かように候ものは、都方にみやこかたに住まひつかまつ仕る者にて候。われいまだ更級の月を見ず候あいだふ間、この秋思ひ立ち姨捨山へと急ぎ候」と、自分は京都からわざわざ姨捨の月を見ようとやってきたということが自己紹介されます。ちよつと話をはさんでおきますと、おそらく、この旅人だけでなくして、ど

れだけの人々がこの更級・姨捨の月を見ようとしてやって来たのか、一例をあげておけば、たとえば、この世阿弥の300年後の俳人の芭蕉も「さらしな里、おぼすて山の月見ん事、しきりにすゝむる秋風の心に吹さはぎて」云々と、有名な「更科紀行」に書いています。この謡曲「姨捨」の旅人も、そうした一人として来たということですね。

そして、そうしてやってきた姨捨山の様子が次のように語られます。「さてもわれ姨捨山に来て見れば、嶺平みねらかにして万里ばんりの空も隔へだてなく、千里に隈くまなく月の夜」云々と、このような姨捨の情景の中で、月はさぞや見事であろうと楽しみに、「今宵こよいの月を眺めばやと思ひ候」と言っ

ています。そこに、主人公であるシテの里の女が登場してきます。二人はそこで出会い、里の女は旅人が都の人だと聞いて、「さては都の人にてましますかや。さあならば妾わらはも月と共に、現れ出でて旅人の、夜遊やゆうを慰め申すべし」と、旅人の夜遊、月見を共にして慰め申し上げようと申し出るわけです。

すると、「そういうあなたはどなたですか」と旅人に訊かれて「名にしおいたる姨捨の、それといはんも恥ずかしや、それといはんも恥ずかしや。その古いにしえも捨てられて、ただひとりこの山に、澄む月の名の秋しゅうしんごとに、執心やみの闇を晴らさんと、今宵あらはれ出でたり」云々と答えます。その名も示す通りに、姨捨のまさにその

捨てられた本人だと、恥ずかしい恥ずかしいと言いながらも、彼女は澄んだ名月の秋ごとに、執心の闇を晴らそうと出て来たんだと、今回はとりわけ、都のみやびも共有できる都人が来ているということもあり、共に夜遊を慰めたいと申し出るわけです。ここですでに「わが心慰めかねつ更級や」と歌われています。そういう亡霊になっても「慰めかねている」というわけです。というより、「慰めかねている」から、亡霊になって現れてきているということですね。その「慰めかね

ている「わが心」を一人ではなくして、旅人と共に慰めようとしているわけです。ここで前場が終わりシテは中入り（中座）をします。その合間に、旅人が里の男から姨捨伝説のいわれを聞きます。それは先ほど見た「大和物語」とほぼ同じ

ような話ですが、ここでは男がおばを捨てたことを悔いて山に戻るのですが、戻るとその時もうすでに彼女は空しくなっていて、その執心が石となっていたと、物語られます。その凝りかたまつた執心を晴らそうとして毎年亡霊となって出てきているんだ、と聞かされます。

「恥ずかしい」という思い

後場になりまして、この旅人が待つていると、先ほどの亡霊が白衣をまとって出てきます。

「あら面白いの折おりからやな、あら面白いのりからや」。この「面白い」という言葉は能にとって大事な言葉でして、世阿弥ももつとも大事にした要語のひとつです。ある期待を込めて、面白くなるかもしれ

ない、ここでは、月を見てそれに慰められるかもしれない、そういう思いを込めて出てきているのが分かります。しかし「昔だに捨てられしほどの身を知らで、

又姨捨の山に出でて、おもて面を更科の、月に見ゆるも恥かしや」と、昔だつて捨てられたという、その身の程を知らずに、今また、こうしてこの執心の闇を晴らさんと現れて出てきていること、彼女は、それを恥じています。実ははじめに登場したときにも恥じていたわけですが、それは人に対して、都人に対して恥じていたのですが、ここではそれが月に対して恥じているわけです。「澄む月」に照らされたら恥ずかしい、と。この部分の演技の仕方を書き留めた『申楽談義』さるがくだんぎというの本の中で世阿弥は、その場面の「恥ず

かしさ」を表現する時には、扇を人に向

います。

かつて遮るかざるのではなくして、「高く上げて、月をもととして、人をば少し目にかけておぼおぼとして、しおさめよ」と、月を遮るように恥ずかしさを表現せよ、そして少し人にもあわせて恥ずかしいようにせよ、と言っています。人に対して、そして、月に対して恥じる形で、しかしなお、その月に慰められて、それを楽しみたいというふうに思っているわけです。そういう交錯する気持の中で、「よしや何事も夢の世の。なかなかいはい思はじや」と、よしや、いや、まあ、何事も夢の世のことなのだ、なまじっかなことは言うまい、考えまいと踏ん切り、「思ひ草花にめで月に染そみて遊ばん」と歌い舞い出すわけです。その場面がこう描写されて

浄土のような姨捨山の情景

「月の名所などころ、いづくはあれど更科や、姨捨山の曇なき一輪満てる清光せいこうの影。…諸仏の御誓おんちかひ、いづれ勝劣なけれども超世ちようせいの悲願あまねき影、弥陀光明みだに如くはなし。…月はかの如来の右の脇士わきしとして有縁うえんを殊ことに導き、重き罪を軽んずる天上の力を得る故に、大勢至だいせいしとは号すとか。…他方の浄土をあらはす。玉珠楼ぎよくしゆろうの風の音、糸竹しちくの調しらべとりどりに、芬芳ぶんぼうしきりに乱れたり。迦陵頻伽かりようびんがのたぐひなき、声をたぐへてもろともに。孔雀鸚鵡くじやくおうむの、同じ

く囀さえずる鳥のおのづから、光も影もおしなべて。至らぬ隈くまもなければ無辺光とは名づけたり」。

——月の名所は多くあるが、なかでもこの姨捨山の曇りない、満月の清らかに澄んだ光は、いづれ勝劣のない諸仏の中でもとくに尊い阿弥陀仏の悲願をあらわす「弥陀光明」のごとくである。そもそも月は、阿弥陀如来の脇士として、衆生の重き罪を救い取ろうとする大勢至菩薩であり、その相好さうごうには、十方諸仏の浄土の様子が映し出され、花鳥風月、とりどり、さまざまのたぐいなきありさまを示し、「光も影もおしなべて、至らぬ隈もな」い「無辺光」につつまれる、といった情景が描き出されます。

この、浄土にまごうばかりの情景のう

ちに、白衣の亡霊は、月と同化し、浄化され、楽しみ、慰みます。このうえなく慰み、また「澄んで」いきます。阿弥陀如来ないし大勢至菩薩の「無辺光」につつまれ、浄福の一時を過ごすのであります。

なお残る「わが心慰めかねつ」の思い

が、そうした浄福に満ちたところでの物語は終わるではありません。こよなく慰められ、また浄化もされながら、なおも物語は「然れども」以下で反転して、次のように展開していくわけです。

「然れども雲月の、ある時は影満ち、又ある時は影欠くる。有為転変の世の中の定のなきを示すなり」。

雲間の月が、ある時は満月となり、ま

たある時は光が欠けるのは、ものみなが移り変わるといふ、この世の定めのないことを示しているのだと、我々の娑婆世界というものは、現実とはそういうものとしてあるのだという謡を受けて、亡霊は「昔恋しき夜遊の袖」、昔が恋しい、夜の遊樂の舞いの袖よ、というふうに歌いだしながら序の舞に移ります。そして以下、「わが心慰めかねつ…」というふうに歌いだされてくるわけです。

「我が心なぐさめかねつ更科や。姨捨山に照る月を見て照る月を見て。…返せや返せ。昔の秋を…思ひ出でたる妄執の心。やる方もなき。今宵の秋風。身にしみじみと。恋しきは昔。しのばしきは閻浮の、秋よ友よと。思ひ居れば…」。

「わが心慰めかねつ」の歌は、この曲で

三度歌われるのですが、三度目のここが最も哀切でして、身をよじるようにして歌われています。阿弥陀如来、勢至菩薩の光の中で、こよなく慰んでいたわけですが、しかし、その光は彼女のもっている、その「慰めかねつ」の思いを、いわば透明に消し去ってしまうわけではなかったわけです。むしろその光はその中で、「返せや返せ。昔の秋を…恋しきは昔。しのばしきは閻浮の秋よ友よ…」というように、まさにやる方のない、やりきれない思いを掻き立て、悲しみを募らせているわけです。

またも「ひとり捨てられる」老女

つまり月の光というのは、老女の思いを慰めるものでありながら、なお「慰め

かねつ」という思いを再確認させるものでもあったということです。闇浮というのは「この世」という意味ですが、しばれてくるのは、この世に生きていた時の、あの昔の秋のことなのだ、あるいは一緒に見た友だちのことなのだ、それを

「返せ、返せ」というふうには、自分でもそれは妄執だと知りながら、どうあつてもその思いは慰めることができないというわけです。そういう悲しい、さみしい

思いを嘆き、歌い、舞い、踊るわけです。しかし、そうしているうちに、「夜も既

にしらしらと、はやあさまにもなりぬれば、我も見えず旅人も帰るあとに」云々と、結局、夜明けを迎え老婆の亡霊の姿

は旅人には見えなくなってしまう。旅人は、彼女がどこかに行ってしまった

と思ひ、山を立ち去ってしまう。老女は

また一人取り残されてしまうわけです。

この作品は、この老女がシオリ、能で泣く所作のことですが、シオリをしている時に、次のような謡が流れて終わっています。

「ひとり捨てられて老女が、昔こそあらめ今も又姨捨山とぞなりにける、姨捨山とぞなりにける」。

老女は確かに昔捨てられた、今もまた、ひとり捨てられてしまった。そして姨捨山となってしまうた、と。

こういう老女のあり方を舞台に登場させて、世阿弥は何を訴えようとしたのか、という問題が問われてきます。むろん世

阿弥は、この老婆を絶望に突き落としているわけではありません。そうではなく、このままの形で彼女を救い取ろうとして

いるということができるようになります。

この「わが心の慰めかねつ」という思いを持つこと、またそのどうにもならない心を表現するということを通して、全体として老婆を慰めていくということがあ

三木清「孤独について」

以下、その点について見ていきたいと思いますが、その前に世阿弥の考えを理解していく補助線として三木清という近代の哲学者の考えに触れておきたいと思

います。「ものが真に表現的なものとして我々に迫るのは、孤独においてである。そして

我々が孤独を越えることができるのは、その孤独の呼びかけに答える自己の表現活動においてほかない。アウグスティヌ

スは「植物は人間から見られることを求

めており、見られることがそれにとって救済である」といったが、表現することはものを救うことであり、ものを救うことによって自己を救うことである(三木清『人生論ノート「孤独について」」)

三木は、この世界にあるあらゆる事物・出来事が、我々にある表現というものを迫ってくるのは、孤独という時に置いてなのだと言っています。そして我々はその孤独を越えることができるのも、その「表現せよ」と迫ってきたその呼びかけに応えて自分が表現したとき以外にないのだと言っているわけです。このアウグスティヌスの「植物は人間から見られることを求めており、見られることがそれにとって救済である」には、それは人間領域を超えた真理でもあるという断固とした確信のようなものを伺うことが

できます。植物も含めて「見られる」「見せる」という表現活動が、ものを救うことであり、ものを救うことによって自己を救うことだというわけです。

こうした考え方を「姨捨」にて適用しますと、老女は孤独において表現が迫られて、その表現を通して、彼女は救われていくのだということになるのですが、ここでの表現というのは、具体的には「慰めかねているわが心」というものを、言葉や歌や舞いで表すことです。ここで「見られる」というのは、直接的にはワキの旅人に、です。そして、その視点を通して、観客に「見られ」、知られるのですが、より根底的には、老女が月に向かって恥じ、あるいは託^{かこ}ち、訴え、願っていたように、この月に象徴されるある大いなる

何か、この曲の中の言い方であれば、阿弥陀仏とも勢至菩薩とも言われてきたような何者かによって「見られ」、そして知られるということ。そのことによつて、その孤独、慰めかねているその孤独の思いは、かろうじて受けとめられるものになるということです。

世阿弥の宇宙論

世阿弥はそもそも宇宙の森羅万象にはすべてそれぞれに序破急^{じよはきゆう}というリズム、拍子を持った表現があるのだという、次のような考え方を述べています。

「能^{よく}能^{よく}安見^{あんけん}するに、万象、森羅、是非、大小、有生^{うじょう}、非生^{ひじょう}、ことごとく、おのおの序破急^{じよはきゆう}をそなえたり。鳥のさへずり、

虫の無く音にいたるまで、其分其分の

理ことわりを鳴くは、序破急なり。しかれば、

面白き音感もあり、あはれもよおを催す心も有

り。この成就じょうじゆなくは、面白しとも、あは

れさとも思うべからず：成就とは成り就

くなり：成り就ひつじゆくは落居なり」。

よくよく案じ考えめぐらしてみると、

森羅万象、良いこと悪いこと、大小、あ

るいは命あるものも、命なきものも、こ

とごとくおのおの序破急というものを備

えている。鳥のさえずりから虫の鳴き声

にいたるまで、その分その分の理を鳴く

のは、序破急なのである。しかれば、面

白いという音感もあれば、「あはれ」すな

わち「ああ」という感動を催す心がある

のだ。そうすることにおいて、それぞれ

が成就していくのである。その成就とい
うことがなければ、面白いということも、
あはれということもない。「成就」という
のは、成り就くことであり、「落居」、落
ち着き、居まうずまうことができることであ
る。先ほどの「すむ」ことができるとい
うことでもあります。

序破急ということ

序破急というのは、始まりがあり、中
間があり、そして終わりがあるという展
開のリズムのことです。鳥のさえずり、
虫のなく音にいたるまで、森羅万象がそ
のリズムにおいて、それぞれが天から与
えられた理ことわり、——本分ほんぶんみたいなもの
ですが、そういう理のままに鳴いているの
だと。だから、そうしたリズムをきちん

と刻めば、あるいは表現すれば、宇宙の
リズムと共鳴していくのだと。そこに「お
もしろさ」もあり、「あはれさ」もあり、
やがてそのことによつて落ち着き、おさ
まりが可能になってくるのであるという
わけであります。

つまり、その鳥はその鳥の声を鳴き、
その虫はその虫の声を鳴き、あるいはそ
の風はその風を吹き、その川はその川を
流れれば、それぞれの序破急というもの
を刻むならば、表現するなら、やがてそ
れぞれの成就じゆうじゆ＝落居らくきよが可能になってくる
ということ。そのようにこの宇宙、
世界はできているのだと。同じように、
我々にも、いかに悲しいこと、苦しいこ
と、辛いことがあるが、それぞれがそ
れぞれの思いを、その理に従つて表現す
るならば、それもやがては受け止められ、

おさめ取られていくのだということですよ。そういう働き、そういう仕組みが、この森羅万象においてあるのだという、世阿弥の確信です。老女が最後に「姨捨山となりにける」というのは、そうした「成就」「落居」のある究極の形を表しているように思います。

小川未明「月と海豹」

近代でもう一例、「月と海豹」という小川未明の話を紹介します。

子どもを亡くした海豹がその悲しみをあちこちに訴える。お月さまにも訴えかけれども、しかしどうにもならない、と、以下原文です。

「子供をなくした親の海豹が、夜も眠らずに、冰山の上で悲しみながら吼ほえてい

るのを月がながめた時、この世の中の、沢山たくさんな悲しみに慣れてしまつて、さまざま感じなかつた月も、心からかわいそうだと思ひました。(中略) しかし、月は自分の力で、それを何どうすることもできませんでした。(中略)「この北海の上ばかりでも、幾正いくひらの子供をなくした海豹がいるか知れない。しかし、お前は、子供にやさしいから一倍悲しんでいるのだ。そして、私は、それだからお前をかわいそうに思っている。そのうちに、お前を楽しませるものを持つて来よう……」(中略) 北の方の海は、依然として銀色こおに凍つて、寒い風が吹いていました。そして海豹は、冰山の上うにうづくまつていました。

「さあ約束のものを持つて来た。」といつ

て、月は太鼓たいこを海豹に渡してやりました。海豹は、その太鼓が気に入つたと見えます。月が、しばらく日の経たつた後に、このあたりの海上を照らした時は、氷が解けはじめて、海豹の鳴らしている太鼓の音が、波の間からきこえました。

これだけの話なのですが、ある特別な力を持つている月でも、それはどうすることもできないこととあります。悲しみをおさめてあげられないし、救うこともできない。これは「姨捨」も同じでした。できることは、ある神社のお祭りの後に落ちていた小さな太鼓を海豹に渡してやるということだけでした。しかしその太鼓をその海豹がたたくことによつて、その音は、氷の解け始めた海上の波の間に響き渡り、海豹の悲しみは、悲し

みのままに北海の海につながとめられる。そういう形で納めとられていきます。先ほどの三木清の言い方で言えば、海豹がその悲しみを越えることができるのは、「表現せよ」という呼びかけに応えるその表現活動においてほかないのでして、太鼓をたたくというのは、すぐれて表現であったということですよ。

「花びらは散る、花は散らない」

ふたたび「姨捨」に話を戻しますと、この曲の眼目というのは単に捨てられたという人間倫理の問題をとうに突き抜けて、人が生き死んでいくことがもっているようにもならない孤絶さが描かれています。能研究者の増田正造さんの言い方を借りれば、この曲が美しくも、しかし冷然とさせるものがあるのは、月に慰め

を求めながらも慰めかねて、孤絶へとどんどん行ってしまふところ、つまり死から生へと戻ってくるのではなくして、むしろ死を突き抜けて別の存在へと変身を遂げたところにある、という言い方もできるように思います。

この「姨捨山」となりけり、姨捨山となりけり」と静かに畳みかけて一曲を終わらせた世阿弥は、遙かに人間世界を越えたところからこの老女を見、そこに彼女をおいているわけです。しかし、なおそこに彼女のいたこと、その思いが残っているということが、鮮やかに歌いだされているわけでありませう。

浄土真宗の僧侶であった金子大栄という思想家の「花びらは散る、花は散らない」という言葉は、そのままこの「姨捨」

の見事な解説になっていると思います。

つまり、山となったとされる老女の、いかんとも慰めきれない思いというものは決して消えることはないということであり、その自分の生きたこと、いろんな「あはれさ」や「おもしろさ」を含めて、むしろあるはっきりとした形をもって、いわばそのままに莊嚴しょうごんされ、飾られ、花になつてきているということです。「花びらは散る、花は散らない」とは、そういう言葉として考えることができます。

「慰霊」とはなにか？

ここで「散らない花」というのは、伝統的には霊とか魂といわれてきたものですが、それは残された側の悼みとか弔いという営みなしにはありえません。東日

本大震災以来、あらためて「慰霊」とか「鎮魂」という言葉が重く響いてきていますが、いったい「霊を慰める」とはどのようなことなのか、あるいは「魂を鎮める」とはどういうことなのか。

「慰霊」という言葉は、実は比較的新しい言葉でして、明治も中ごろ以降から使われ出したものです。今では一般に我々も合同慰霊祭とか慰霊式という使い方として、大事な言葉として使っています。

今日の話の関連でいいますと、霊をなぐさめる、霊をしずめる、という言い方と、霊が浮かばれない、霊が浮かばれるという言い方で語られている問題があります。「浮かばれない」というのは、無念な思い、晴れない思い、慰められない、報われない思いを持ったまま成仏できない

ということ事です。「浮かぶ」という事態の中身それ自体についてはなお慎重に検討する必要がありますが、ともあれ、霊を慰めるということが、単にそれを押しなだめて、しずめ、最終的にそれがなかったこととして消去するのではなく、その人の生きた思い、とりわけ「慰めかねつ」の思いを聴きとめ、「浮かび」上らせること自体において、「慰む」ということが可能だということでもあります。あらためて確認しておけば、「慰霊」とは、しずめる（沈める、鎮める、静める）ことではなくして、「浮かべる」ことだということです。

「鎮魂」とはどういうことか？

同様の事情は、「鎮魂」という言葉にもあります。「鎮魂」という言葉は、もともと

と「鎮魂め^{たましず}」というふうに使ってきたことから言えば、相当に歴史を持つ言葉ですが、今我々が普通に使っている「鎮魂」は、これも比較的新しい明治以降の用法です。キリスト教的なレクイエムとかミサという言葉も含めて使っているのですが、この言葉も複雑です。もともとの「鎮魂」というのは、「遊離した、また遊離しようとする魂を鎮め、肉体につなぎ止める祭儀」を意味し、広義には、「魂振^{たまふ}り」の意味で使っていたものです。「魂振り」とは、魂に活力を与え、再生させる「こと」でして、ここには折口信夫はじめ、古代からの神道の考え方をよりくわしく考え合わせる必要がありますが、「魂鎮め」ということが単に魂を押ししずめてしまうのではなく、一方に「魂振り」

という魂を振り起こし、むらがり起こす
ということが含まれていたということとは
大事なことだろうと思います。なにより、
万葉以来、その人の「慰めかねつ」の思
いの表出である相聞・挽歌そうもん ばんかの歌を詠むこ
と自体が、魂振り・魂鎮めの営みであつた
ということなのです。

「慰め」続ける以外に「慰め」られない

「姨捨」というのは、特殊な時代の特殊
な風習ではありません。それはいわば、
いついかなる時代においても、「老いて、
死ぬ」という自体がもっているさびしさ
であり、それはついに解消しえない「慰
めかねつ」の思いの表現だろうと思いま
す。豪華な特別ホームに入れられようが、
粗末な施設に入れられようが、あるいは

最後まで家族と一緒に暮らしていよう
が、「老いて、死ぬ」最後のところは一
人であり、すべての人がいわゆる「姨捨」
という事態を迎えるという言い方もでき
るということです。

繰り返しておけば、それをどこまでも
慰められない、本人にも慰めきれないこ
とでして、でもそのことをそのこととし
て受け止め、そしてなおかつ「それでよ
い」、「それでこの宇宙におさめ取られて
いくのだ」ということを思いながら、し
かし我々としては、慰めるというのは結
局「慰められない」ということを繰り返
し思い続けながら、なお、そうし続けて
いく以外にないことだということなのです。
これは大事なことだと思えます。慰め続
ける以外に慰めることはできない、とい
うことでして、簡単に慰め得た、と思っ

のは、それは、——これは辞書の「慰む」
という語義にも載せられているのですが
——相手を「慰みもの」にしている、あ
るいは「弄んでいる」ということになつ
てしまうということなのです。

姨捨山の景観について

今日申し上げてきたようなことは、あ
のポスターにあるような、心の原風景に
近いようなことですが、そういう事柄が、
あるいは感じ方、考え方が、更級・姨捨
の地において「月を見る」ということに
おいて可能になっているということでは
この姨捨の地の光景なり風景なりは、そ
れ抜きには語れないわけでした、先ほど
の謡曲の中にあつた「嶺平みねらかにして
万里ばんりの空も隔へだてなく」云々というような、

あるいは、この世が浄土さながらの様子であるというのは、この地のあり方を語っているわけです。姨捨山をはじめとする山の形とか、千曲川とか、棚田なども含めてこの山並み、川の流れが一望できる「場」であるという、この景観のあり方が決定的に重要なのでして、そういう「場」があるがゆえに、今まで申し上げて来ているような考え方や感じ方が語られ続け、息づいて来たのだと思います。

国木田独歩の「懐かしさ」

同じように、悲しい、「慰めかねつ」の思いを抱きながら、なおこの宇宙は、この世界は「それでいいのだ」と語った文学者に国木田独歩という作家がいました、それがこの景観ということも言っています。最後に、この点について見ておこう

と思います。独歩は、代表作「忘れえぬ人々」という作品の中で次のように言っています。

「そこで僕は今夜のような晩に独り夜更けて灯ともしびに向かっているとこの生の孤立を感じて堪えがたいほどの哀情を催して来る。その時僕の主我の角つのがぼきり折れてしまつて、なんだか人懐かしくなつて来る。いろいろの古いことや友の上を考へだす。その時油然ゆうぜんとして僕の心に浮かんで来るのはすなわちこれらの人々である。そうでない、これらの人々を見た時の周囲の光景の裡うちに立つこれらの人々である。我ひとと他と何の相違があるか、みなこれこの生を天の一方地の一角に享うけて

悠々たる行路を辿り、相携たずさえて無窮の天に帰る者ではないか、というような感が心の底から起こつて来て我知らず涙が頬をつたうことがある。その時は実に我もなければ他もない、ただ誰も彼も懐かしくつて、忍ばれて来る、僕はその時ほど心の平穩を感じることはない、その時ほど自由を感じることはない、その時ほど名利競争の俗念消えてすべての物に対する同情の念の深い時はない」。

ここで独歩は悲しみの中にいます。耐え難いほどの哀情の中にいるわけですが、なおかつ、彼は「それでよい」というふうに肯定し、ある種の安定を得ているわけです。

独歩の景観論

ここで大事なことは、そんな時「忘れぬ人々」を思い出すんだと言った後、あえてそれを言い換えて、「そうでない、これらの人々を見た時の周囲の光景の裡に立つこれらの人々である」というふう

品の中ではこう述べています。

「月はさやかに照り、これらの光景を

もうろう

だえんけい

朦朧たる楕円形のうちに描きだして、田

園詩の一節のように浮かべている。自分

たちもこの画中の人に加わって欄に倚つ

て月を眺めていると、月は緩やかに流る

る水面に澄んで映っている。羽虫が水を

搏つごとに細紋起きてしばらく月の面に

小皺がよるばかり。流れは林の間をくね

って出てきたり、また林の間に半円を描

いて隠れてしまう。(中略) 一種の生活と

一種の自然とを配合して一種の光景を呈

しおる場処を描写することが、すこぶる

自分の詩興を喚よび起こすも妙ではない

か。なぜかような場処が我らの感を惹く

だろうか。自分は一言にして答えること

ができる。すなわちこのような町外れの

光景は何となく人をして社会というもの

の縮図でも見るような思いをなさしむる

からであろう。言葉を換えていえば、田

舎の人にも都会の人にも感興を起こさし

むるような物語、小さな物語、しかも哀

れの深い物語、あるいは抱腹するような

物語が二つ三つそこらの軒先に隠れてい

そうに思われるからであろう」。

「一種の生活と一種の自然とを配合して

一種の光景を呈しおる場処」

これは武蔵野という地の光景を描いて

いるので、そのままこの更級・姨捨の地

に当てはまるということではありません

が、基本にある考え方、「一種の生活と一

種の自然とを配合して一種の光景を呈し
いを呼び起こすことにおいては、全く同
ているということだろうと思います。

おる場処」「物語、小さな物語、しかも哀
じことが言えるように思います。
ご静聴ありがとうございます。

れの深い物語、あるいは抱腹するような
「わが心慰めかねつ更級や姨捨山に照る
(文字おこし 長谷寺住職・岡澤慶澄)

物語が二つ三つそこらの軒先に隠れてい
月を見て」という歌、またその歌が喚起

そうに思われる」というような「場」と
する物語や詩興、この更級・姨捨の「場」

してあるがゆえに、この詩興、詩の味わ
が、またその「場」の月が、呼び起こし

《了》